

わたくしの足跡 中国

津田あけみ

わたくしの足跡 中国

津田あけみ

はしがき

中国の地を踏む日本人は、自身の中国との関係の深淺に應じて、さまざまにちがった感懷をもつだろうと思う。私は一九四三年（昭和一八年）後半から丸一年間を、上海で過ごしたが、幼いころだったから記憶は定かではない。だから一九八〇年（昭和五五年）六月に、中国を旅行する機会がやってきたときも、初めての国に行くのと同じ気持であった。

社会主義国の旅程は単調で、すべてが官僚機構の中で一本調子に動いた。風景は、慣れた日本の風景とほとんど同じであった。思い出すと、私の今までの外国への旅はすべて石の文化を求めた旅であった。日本と同じような木の文化を求めて、外国を訪れたのは今回が初めてであった。木の文化は、日本と同質の文化であった。この二つの理由で、中国の遺跡を追う旅に、私は急速に興味を失っていった。

日程を詰めた旅行は、中国のように長い歴史をもち、それが続いている国の場合には、旅行者の心に大混乱をもちこむ。例えば私たちの場合、ある一日に、午前中には六四八

年建立の寺院の塔と、一六一六年建設の樓閣を訪問し、午後には紀元前五、〇〇〇年の遺跡と六八四年建立の塔を見学するということになる。一日の間に何千年もの間を往復するのは容易なことではない。旅行前に一生懸命にノートをとって準備したつもりの私も旅を続ける間に疲労が蓄積していった。そしてそれにも増して、炎暑は苦しかった。

だが、このような事情で、今までの旅のように遺跡の見学に目を見張り続ける姿勢を、失いがちになるのとは逆に、旅の後半から、現在の中国に対する興味がすさまじくわきあがってきたのである。上海、西安、洛陽と、街中に出る度に、私たちは黒山の人だかりにかこまれた。早朝でも午後でも。そして私もまた、それらの人々に興味をもち始めたのである。

帰国後、私は現代の中国について書かれている、手に入れられる限りの本を読みたいと願った。毎日毎日、それらの本からメモをとるノートの冊数が増加していった。こんなにたくさんの方の中国に関する著作が出版されているとは、想像もしなかった。私の部屋は、今では中国関係の書籍で、あふれてしまっている。現代の中国に、これほどの関心を私にあたえてくれた今回の旅行を、私は心から感謝している。

だが、現在の中国を語る前に、私は中国の歴史を勉強しなければならないと思う。そこで私は、訪問した遺跡の数々を手がかりにして、歴史をまず勉強することにした。見

学した遺跡を時代順に並べ変えた。こうして出来上がったのが本書である。だから本書では、見学した遺跡が少ない時代の記述は簡略になってしまっている。例えば、宋・元の時代（Ⅷの1）が典型的である。この著作は、私が訪問した遺跡を中心にして、それを時代順に書き直したものである。

退屈になるのを少しでも防ぐために、できるだけ多数の写真を入れた。そのほとんどすべては父と私が、旅行中に撮影したものである。また地図や年表も工夫して入れておいた。

最後の章で、現在の中国について、ほんの少しふれている。これからいよいよ、ここを集中的に勉強するつもりでいる。

昭和五六年四月

津田あけみ

はしがき..... i

I 歴史のあけぼのをたずねる..... 3

1 半坡遺跡 4

直立猿人群 旧石器時代 新石器時代 仰韶文化の半坡遺跡
発掘現場 彩色土器 竜山文化など

2 洛陽博物館 12

『史記』の時代 洛陽博物館 夏の宮殿模型

3 歴史時代の開始 16

殷(商)王朝 遼の都 小屯村 武官村大墓 周の立朝 周公
旦 東周の時代 東周王城跡へ 斉都の王城地 洛陽諸城の盛
衰

II 春秋戦国と秦..... 31

1 春秋時代 32

春秋と戦国の時代 呉 越 呉越の戦い 春秋時代の終り 奴
隸決起年表

2 戦国時代 36

戦国時代 諸子百家 会盟 楚の興起 斉・秦の対立 四君時

代 秦の商鞅 秦の子楚

3 秦の始皇帝 43

秦の始皇帝 始皇帝の中央集権 城壁時代 万里の長城 秦の
始皇帝陵 始皇帝兵馬俑坑 南輔助陳列室 出土兵器陳列室
第一号俑坑

III 漢代の興亡..... 63

1 漢(前漢)の時代 64

胡亥帝 項羽と劉邦 漢の高祖 高祖の天下統一 漢の武帝
金縷玉衣を見る 中山王の墓 匈奴との戦い 茂陵 咸陽博物
館 楊家湾漢墓陶俑 後漢の石騎馬人 博物館に立って 張騫
西域の地

2 前漢の衰亡 81

司馬遷 『史記』 武帝から宣帝へ 前漢の衰亡

3 後漢の時代 85

後漢の成立 光武帝 仏教の普及 白馬寺にて 青雲塔 後漢
の時代

IV 竜門石窟..... 97

1 南北分裂の時代 98

- 2 三国時代 司馬一族 竹林の七賢人 五胡の時代 北魏おこる
竜門石窟 105

- 2 竜門石窟に立つ 竜門石窟の仏洞 古陽洞 寶陽中洞 鞍作止
利 蓮花洞 洛陽に立つて

- 3 隋・唐と竜門石窟 115

北魏の東西分裂 隋の成立 唐の統一 太宗の墓陵 唐の高宗
武周革命 唐代の仏教 寶陽南洞 寶陽北洞 潛溪寺

V 玄奘三蔵の時代

- 1 玄奘三蔵の足跡 126

玄奘三蔵 大慈恩寺へ 大雁塔 雨に煙る大慈恩寺 玄奘三蔵
の經典翻訳 興教寺にて

- 2 大薦福寺と奉先寺 139

大薦福寺 小雁塔 奉先寺 奉先寺の大仏 盧舍那仏 万仏洞

VI 唐代の人びと

- 1 乾陵を見る 148

咸陽市 乾陵 無字碑と述聖記碑 墓道にて 乾陵の陪冢 永
泰公主墓へ 墓の前室 墓の玄室 文物陳列室 懿德太子墓の
出土品 唐三彩

- 2 唐代王朝の人びと 171

則天武后 玄宗 楊貴妃 楊貴妃の華清池へ 華清池 五間庁

- 3 唐代をしのぶ 179

碑林 唐の長安城 阿倍仲麻呂 遣唐使の人びと 安祿山の乱
李白 杜甫 潼関を過ぎて 李龜年の惨 白居易 唐の滅亡

VII 明朝の跡

- 1 宋・元の時代 202

宋から元まで 発明の時代 紙 印刷術 火薬 磁石 光は東
方から

- 2 明朝の興隆 206

明の成立 洪武帝の独裁 洪武帝の画像 建文帝 明の成祖
鄭和の遠征艦隊 宣德帝の独裁 蒙古の侵攻 明王朝の動揺

- 3 万里の長城に登る

万里の長城 始皇帝の長城建設 長城の拡大 孟姜女 版築法
現在の長城 居庸関 万里の長城へ 樹木なし

- 4 明の皇帝たち 229

張居正 万曆帝の三大征と三案 陶業の発達 学術の伝来 通
俗小説の全盛

5 明の十三陵 232

明の十三陵 万曆帝の墓陵 定陵 金翼善冠 皇后鳳冠 玉杯
と玉碗 地下宮殿

VIII 清朝の時代

1 清朝の興隆 248

明の滅亡 清の建設 清朝の確立 清の乾隆帝 嘉慶帝 アへ
ン事件 外人居留地の成立 太平天国の乱 西太后と東太后
光緒帝 義和団の乱

2 紫禁城をめぐる 259

紫禁城 天安門 午門 太和門 太和殿 中和殿 保和殿 櫓
雕石 乾清門から寧壽門へ 絵画館 珍宝館 青銅陳列室 乾
清宮 交泰殿 神武門 西六宮 景山 頤和園

IX 中国の現在

1 汽車の中で 284

洛陽から北京駅へ 早朝の農民たち 行儀のよい乗客たち 中
国人の無関心さ 激動の中国への関心 文革と北京駅

2 人民公社 297

目標は農業集団化 初級合作社 高級合作社 人民公社の制度

3 化へ 大飢饉の発生 都市近郊の人民公社
北京市にて 305

北京市 天壇 天安門広場 王府井大街 劉少奇の名誉回復
壁新聞 東安市場 中国歴史博物館 もっと中国を知りたい

日本工業倶楽部「中国友好の旅」の日程

参考文献

あとがき

わたくしのこと

325
333
335
341

あとがき

父から「あけちゃん、工業倶楽部の旅行会で上海に行けるかもわからないよ。お母様と三人分、申し込んだよ」といわれたとき、私はしばらくとまどってしまった。両親にとつての上海は、引き揚げ後の三六年間、再訪を心に秘め続けていた地だ。一九四三年から四四年までの丸一年間、私たち家族は上海のフランス租界に住んだ。この一年間が、戦中戦後のきびしい時代を通じて、両親にとつてはすばらしい一時期だったのだ。だが、私の上海の記憶は薄く、断片的である。その上私の上海は、いつも上海港から父と別れ、母に連れられて日本に引き揚げるといふ、哀しい思い出の戦争体験の総括なのだ。両親にとつては、夢のような思い出の上海と私の上海の記憶の間には、大きな隔たりがありすぎた。その断絶をどのように埋めるかを考えると、上海再訪は気が進まなかった。しかし親子三人の旅をたのしみに行っている父を見ると、気が重いとはいえなかった。また、現代中国の息づまのような政変は不気味だし、言動の自由がなくて消化不良をおこしそうな気もした。だがまた、日程にある西安や洛陽は、はるか昔から私たち日本人の

心の郷里だ。行ってみたい場所ではあった。

『父と母とわたくしの上海』（昭和五六年三月）にも書いたけれど、中国最初の訪問地は上海だった。現実の上海から受けた両親の打撃は、やはり大きく深かった。昔の夢のような上海は、もうなくなっていた。心の晴れない旅を続けることになった両親を見て、私は、つらかった。

今回の旅行には、いろいろな方々が参加していた。第一に、上海に住居をかまえて家族とともに過ごした人、第二に、仕事の関係で単身赴任や旅行で、昔の上海や北京を訪れたことのある人、第三に、北京に家族とともに居住した人、第四に、戦前の中国をまわった知らない人に大別できたと思う。この中でいちばん、心が深く傷ついたのは、第一の分類に属する私の両親だったろう。上海の街は労働者の街に一変していた。現在の中国には、中流階級も上流階級も存在しなくなっていた。一〇億の人口のうち、たった一、七〇〇万人の特権階級といわれる、党幹部指導者が政治をおこなう、労働者の国が中国なのだ。

昔、ロベール・ギランに「六億の蟻」といわせた、紺色木綿の、画一的な制服を着た、あふれるばかりの、全世界の四分の一を占める人々。

すべての人が、貧しさの中で平均化されてしまっていることがやり切れない私の両親。

市街のたたずまいは、往時の姿をとどめてはいるものの、当時そのままに古く老朽化した外装のビルは、どんよりと灰色にくすんでいた。老いさらばえたビルの街並は、両親にとって無残な姿と写っただろう。夢は夢だった。昔の夢を追いつつ続いていた三六年間の歳月は、上海到着後、わずか一時間のうちに打ちくだかれていたのだ。両親にとつては、余りにもかわいそうな旅に終始してしまった。幼い私たちに語り続けた、すばらしかった私たちの家は、雨の中で薄汚れ、大きなビルだから、それだけにかえって痛々しく目立った。旅行中に父が時々もらす深い溜息を聞くのは、堪え難かった。

両親の心痛を感じながら、心の晴れない旅を続けるうちに、やがて私は現代中国に興味を持ちはじめ、沈滞から脱皮しはじめた。両親と私とは、同じ旅を続けながらも、途中から別個な旅をしたことになる。両親は、私が興味の持てるようになった旅をよるこんでくれたと思う。しかし私は、とうとう旅行中立ち直ることのなかった両親を思つて、今も深く心の痛みを感じ続けている。だから『父と母とわたくしの上海』を、私は父と母のために一生懸命に書いた。

父は洛陽で、大きな唐三彩の馬を求めた。それを風呂敷に包んで、いつも大事に抱えていた。「持つて上げる」といっても、決して私に持たせなかった。あの風呂敷の中には、昔のなつかしい「上海」が入っていたのだと思う。そして今、洛陽の唐三彩は、両

親の家の応接間に飾ってある。昔の上海はもはや、飾りものにしかないえない、ということを感じているのだろうか。それとも唐三彩の中に、昔の上海をしのんでいるのだろうか。

そのころ北京に住んでいた人たちは、天安門前の広場や長安街、そして中華人民共和国の首都となった昔の北京が、新しく区画整理がされ清潔になったことで、両親ほどの打撃は受けなかったようだ。

本書は先にも述べたが、日本工業倶楽部旅行会と日本交通公社による、「中国友好の翼」(上海・西安・洛陽・北京コース)、昭和五五年六月一日(火)から六月二三日(月)までの、一四日間の中国の旅をまとめたものである。鈴木厚団長以下、三〇名の団員の皆様には、いろいろと旅行中お世話になったことを感謝している。

両親と私が東京を留守にしている間、一人東京に残った夫、真激さんを彪衛、都子さん夫婦、隼雄、スミ子さん夫婦、そして結婚後間もない良知、光子さんの新婚家庭までもが、各々夕食にご招待下さった。私や母が旅行に出かけると、いつも決まって弟たちの家庭から夕食のお招きにあずかる。帰国後、「ヒーマ(彪衛)の家ではね……」「ハーマ(隼雄)の家ではね……」と楽しかった甥や姪たちとの語らいや、お料理の話を嬉しそうに話してくれていた夫は、今回、いちばん下の弟の良知も結婚し、ご招待して下さい

る家が一軒ふえたので、週末のスケジュールはびつしりだったなどと、聞かせてくれる。都子、スミ子、光子さんたちにはいつも心から感謝をしている。

夫はいつも、よろこんで旅に出してくれる。今回も、私が中国の勉強を始めるやいなや、夫はあちこちの書店から、中国関係の本を求めてきてくれた。先日長い間探し続けていて、どうしても手に入らなかった文革時代の新聞や、鄧拓の『燕山夜話』や『三家村札記』を、神田まで出向いたとき、内山書店で見つけたといつて、興奮して帰って来た。夫の集めてくれた文献やスクラップしてくれた新聞の切り抜きの中国関係の資料を利用して、一九四九年以降から現在までの中国について、続いて勉強し、書きたいと思っている。中国とは、それほど魅力あふれる、興味つきない国である。

この本は原稿完成の四月末から校了の九月中旬まで、非常に長い期間を要した。中間に五月の連休と、印刷所のお盆休みが入ったということもあるが、大部分の理由は中国字と日本語との照合や史実の確認、遺跡、遺物名の正確な名称の確認に時間がかかったことにある。校正をしていた中央公論事業出版の校閲部長梅醇氏の情熱には、本当に頭が下がった。例えば、「諸橋大漢和辞典ニモ中国簡体字ニモナシ」と、私が駆け足見学でとったノートのメモを見て書いた將軍像の名称を注意されたり、「時速四、五〇キロで走る自転車」と書くと、「自転車ニシテハ速スギナイカ」などとご注意をうけた

りで、校正をしながらおろおろと資料、文献、字引をめくる日が続いた。

梅さんのご指摘がなかったら、さぞかしみつともない本になっていただろうと思う。すばらしい校正をしていた。厚く御礼を申し上げておきたい。

張り切って出発した久しぶりの、親子三人の旅であった。帰国後一〇ヵ月たって、やっとあの変貌した上海の、心の痛手から立ち直りつつある両親を見ることは、幸せであり、私の心は安らぐ。

両親とともにありながら、一人だけ別の方向を向いて旅を続けた悔いを感じながら、この書を再びわたくしの父と母（竹内昇・信子）に……。

わたくしのこと

一九六二年七月から一九六四年七月までの二年間をイリノイ大学に勤務した夫とともに、アメリカの典型的な中西部の地方都市、シャンペーン・アーバーナに滞在した。この間、労働組合や工場の調査に出掛ける夫に同行して、アメリカ国内を二〇州以上訪れた。当時の富めるアメリカ、強いアメリカは私にとって強烈な印象だったが、一方、人種差別と貧困な白人と黒人の一群を抱える、苦悩を内蔵した国でもあった。そしてアメリカでの一番の思い出は、一九六三年一月二二日（アメリカ日時）のケネディ大統領の暗殺事件である。忘れることはできない。

一九六四年七月。二年間のアメリカ生活を終え、ニューヨークの万国博を訪ね、欧州八カ国をまわって帰国の途へ。ロンドンで、出稼ぎの黒人やポルトガル人らしい南欧系の、英語の話せない人たちが単純労働に従事しているのに驚いた。東西ベルリンの壁に沿ったビルの窓はコンクリートで塗り固められ、壁の鉄条網のあちこちにあった多くの死者への墓標の十字架と花輪の数は、今でも記憶に新しい。東西デタントの極限だったのだろうか。

一九七一年一〇月。母とヨーロッパへ。アイスキュロスの「アガメムノン」とシユリーマンと「獅子門」のミケーネ。アクロポリスの丘の上にそびえるパルテノン神殿。

一九七三年一〇月。母と西欧、東欧へ。スペインのセゴビアのローマの水道橋と、ブタペストのローマの遺跡を見て、ローマ帝国の領土の広大さに驚く。ミラノで「最後の晚餐」を見る。この壁画を見たとき、なぜか全身が凍りつくようだった。

一九七四年五月。母と中欧、南欧へ。シヨバンとジョルジュ・サンドの「雨だれ」で知られるバルデモーサの修道院の余りのきれいさがかえって哀しかった。帰途弟の良知とシカゴで合流。アメ

リカ、カナダへ。

一九七五年三月。母とエジプト、中近東へ。イスファーフアン、ペルセポリス、ナクシイ・ルス
タム、バビロン、パール・ベック、犬の川の岩碑、ビプロス、バグダード博物館と実り多い旅行。
一九七六年四月。父、母と三人でシルクロードへ。アレキサンダー、チンギス・ハーンにふれ、
ブハラ、サマルカンドと中央アジアからバーミヤンまでの、失われた仏教文化と点在するイスラム
文化を見る。

一九七六年六月。公務出張の夫と弟の良知のいるアメリカへ。インディアン・リザベーションの
不毛の土地と、貧しいインディアンの生活を見る。

一九七六年十一月。母と友人たちとヨーロッパへ。三度目にやっと訪れることのできたナポリ国
立博物館のアレキサンダー大王とダレイオス三世のモザイクに感動する。

一九七七年十一月。母と南米、中米へ。クスコ、マチュ・ピチュとインカの遺跡を歩き、母と二
人、夢中で歩いたユカタン半島のマヤの遺跡、チチェン・イツツァ。

一九七八年十一月。チュニス・アルジェリア・モロッコの北アフリカのマグレブ三国へ。砂漠に
華開いたイスラム文化に消滅させられたカルタゴ、ローマの遺跡を訪ねたすばらしい旅だった。サ
ハラ砂漠はあたたかかった。この旅の感動をどうしても両親(母は足が悪くて一緒に行けなかった)
に知ってもらいたくて、はじめての本『わたくしの足跡 マグレブ』を書いた。

一九七九年四月。弟の良知とエジプトへ。古王国のギーザのピラミッドからコム・オンボやエド
フのプトレマイオス王朝末期まで、エジプトの歴史の流れを見きわめた旅だった。帰途弟の彪衛と
マニラで合流し、姉弟三人でマニラと香港を一週間見物した。マニラでは、レストランのパーキン
グ係までが腰にピストルを下げているのはびっくりした。

一九八〇年四月。母とトルコとエーゲ海へ。ディディマ、ミレトス、エフェソス、ペルガモン
と、ギリシャの植民都市を訪ね、砂に埋もれた岩山に残る遺跡を訪ねた。クレタ島のクノッソス宮
殿を見、イスタンブール博物館を見学し、コンスタンティノープルの城壁に登った。トロイの丘に
立って遠くをながめれば、攻め寄せるギリシャ軍の馬のいななきが、風にのって聞こえてきた。忘
れ難い旅だった。

余りにも印象深い旅だったので、もし中国に旅をしていなかったら、この旅行をまとめて本にし
ていたと思う。

一九八〇年六月。両親と三人で中国を訪れた。旅行自体は、余り興味をそそられなかったが、私
は今、中国に夢中である。もっと勉強をしたい。そのための下敷きのノートとして、この書を書い
た。

わたくしの足跡 中国

発行日 昭和五六年一〇月一〇日

著者 津田あけみ

東京都大田区久が原四一八二〇

製作 中央公論事業出版

東京都千代田区丸の内二一四一
丸ビル五八八区

印刷 広研印刷

製本 藤功社

限定三〇〇部*非売品